

## 死生学の構築へ向けて

### — ライフデザイン学的アプローチの探求 —

池田千登勢***	井上治代**	菊地章太** <sup>1)</sup>
北真吾***	繁成剛***	柴田範子*
白石弘巳*	杉田記代子**	出村早苗*
野村豊子*	水村容子***	山本美香*

#### 要旨

死生学とは、人間の死を見つめる研究であり、死を通していかによく生きるかを考えていく学問の総体である。さまざまな研究分野にたずさわりの、あるいは現場での社会実践を行なっている私たちライフデザイン学部の教員が、個々の知識と経験を踏まえながら、死生学の構築へ向けてどのようなアプローチが可能かを検討し、そのうえで死生学をキーワードとした学祭的ネットワークづくりを試みることを本プロジェクト研究の目標である。

このような目標のもとに、多様化する死生学の諸相をどのように理解し、どのようにそれと向きあうかについて、ライフデザイン学という総合的かつ学際的な視点からのアプローチの可能性を探求することを当面の課題として設定した。本学部の特徴として、共同研究者の研究分野が多岐にわたっていることがあげられる。そのような利点を活かし、プロジェクトのメンバーが各自の研究テーマを深化させつつ、共通の問題意識のもとに相互交流を行ない、テーマの一層の拡大をはかることをめざした。

#### 1. 死生学の構築

死生学 (thanatology) はヨーロッパではじまった学問である。語源である *thanatos* は古典ギリシア語で「死」を意味する。ここには「生」は含まれていない。しかし日本では最近「死生学」という述語が定着してきた。この学問が人間の死を見つめる営みであることは言うまでもないが、決してそれに尽きるものではない。死生学という述語はその意識を反映したものと捉えることができよう。

死を見つめるということは、死んでいく人にとっては人生の最後の段階に至るまでの生を見つめることである。家族をはじめ周囲の人にとっては、その人の死を看取っていくことでもある。さらに、あとに残された人にとっては、その悲しみを乗り越えてこれからの自分の生をどのように見つめていくかを問うことに他ならない。それは死にゆく人の、そしてあとに残された人の、よりよい生を探求していく思索と実践の試みである。すなわち死生学とは、死を対象とするだけでなく、死を通していかによく生きるかを考えていく問題群であると言うことができよう。

<sup>1)</sup> 研究代表者

\* 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科

\*\* 東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科

\*\*\* 東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科

したがって死生学という学問は研究と実践の両面からなされるべきものであり、さまざまな学問領域にかわりを持っている。すでに国内のいくつかの大学や医療機関などで学際的研究としてスタートしており、上智大学や神戸六甲病院などの活動が注目を集めている。このような学問分野への認識を深めることは、学部の研究教育活動をより一層充実させていくためにも有効な課題ではなからうか。私たちの学部には、人間探求において死を射程に入れた研究に携わっている教員がおり、現場での実践活動のなかで日々そうした局面に向きあっている教員も少なくない。その点で、他のどこにもまして研究と実践の幅広い領域をカバーできる可能性を持つものと期待できるのではないか。

また、学部の研究教育活動における課題のひとつとして、ネットワーク学の構築をあげることができる。現学部長である高橋儀平氏は学部紀要『ライフデザイン学研究』第三号の巻頭言においてこのことを主張しており、そのなかで「人の暮らしや社会の営みにとって有益な、未来へ向けてのネットワーク学」という言葉を用いていた。多彩な専門分野にわたる研究者を擁する新設学部の特徴を活かして、積極的に研究交流や情報交換の場を築いていきたいと思う。それにはいろいろな可能性が考えられるが、まずは死生学をひとつのキーワードとしてみるのがこのプロジェクト研究の出発点である。では具体的にどのような研究と実践が可能なのか。

## 2. 死生学の研究と実践

まず研究の主導的位置を占める領域として「死への準備教育とその役割」があげられよう。そこには死生学に関する研究方法の探求とそれにもとづく教育現場での実践が含まれる。死を迎える人の心構えはもとより、家族やケア・スタッフの心構えも論点となるであろう。子どもにとっての生と死を考えることも必要であり、子ども期のいのちの教育は今後の課題である。動物介在療法も最近注目されており、家族の一員であるペットの死がこれに関連するであろう。以上を視野に入れつつ、教育現場における死生学教育の可能性を考えてみたい。

次に、今日的な重要課題として「終末期ケアとその環境形成」があげられる。ホスピス・ケアの問題点と課題を見すえながら、終末期ケアの実際に目を向けてみた。その際に、どのような場で死を迎えるかの選択とそのための住環境の整備は、終末期の環境形成にとって緊要の課題である。医療情報学や建築計画学も含めた複合的な観点からのアプローチが必要であり、将来においても共同研究にとって好個のテーマが導きだせるのではないかと期待される。

次に「死をめぐる医学上の諸問題」はこの研究にとって不可欠の領域である。死に関する医学的認識は臓器移植の問題にもつながっている。緩和ケア病棟における鎮静のあり方、あるいは助死師の役割と限界についても考える必要がある。死を迎える人の家族への対応、さらには医療現場における告知と説明のあり方が課題として設定できた。孤独死や安楽死の問題も視野に入れる必要があり、そこにはまた生命倫理についての理解が基盤となるにちがいない。

次に「残された者の心の癒し」をあげることができる。研究代表者である筆者の意見では、この領域こそ本研究にとって本質的とも言えるのではないか。死の危機とそれに対するスピリチュアル・ケアにはじまり、家族を見守ってくれる亡き人への思いへとつながる心情に注目したい。自死遺族とグリーフケアの問題も含めて、死後の家族の悲嘆ケアがそこでの大きな課題となる。共同研究者によって遺族による回想の語りを実践するつどいが持たれたが、遺族の生きがいの構築は今後ますます注目されるテーマであろう。

次に、将来に向けて大きく期待される領域として「フューネラル・デザインの創造」があげられる。これは都市計画という大規模な次元から個々人の思い出の品々にまでおよぶきわめて広範囲な領域を含んでいる。都市における墓域の設定や墓地とともにある癒しの生活空間づくりがすでに各地で模索されており、墓廟建築や葬祭施設の設計も多様化している。埋葬意識が変容するなかから自然葬墓地の受容もうかがいがってきた。さらに現代住宅事情を踏まえた仏壇製作は重要な課題であり、最近では手元供養品のデザインやエ

ンバーミングの技術も普及しつつある。

最後に「死生観の探求と死者祭祀の歴史的理解」をあげたい。葬墓制を支える死生観についての宗教学的考察、先祖崇拜や死霊救済儀礼にかかわる民俗学的考察、これからの死者祭祀のあり方を問う社会学的考察など、人文科学と社会科学のいくつかの分野におよぶ多面的な考察を通じて、あらゆる実践の基礎となるような精神的背景の理解をめざしたいと考えている。

ここに列挙されたこれだけの領域をカバーできる死生学というのは、やはり本学部ならではのことはな  
いかと思う。他にもまだ多くの項目が立てられるであろうが、まずは共同研究者が任意にいくつかの項目を  
選択することで共通に語り合えるテーマを見つけていくことを一年半の研究期間中に試みた。今回、その成  
果の一端をここに報告する運びとなったのである。

### 3. 研究成果と今後の課題

以下にプロジェクト研究成果報告集の目次を示す。

はじめに	死生学の構築へ向けて
池田千登勢	死別・離別の苦しみから回復する過程に関するヒアリング記録 — 回復期に影響のあった行動、創作活動とその意味
池田千登勢	医療現場におけるアートセラピーの可能性に関する研究 — 重度障害者を含む患者を対象とした作品の制作と利用の方法を探る
井上治代	無縁社会における墓を核とした結縁 — NPO法人エンディングセンター「桜葬」の試み
菊地章太	位牌成立史試論
北 真吾	LIFETIME: 生成的デザイン表現の可能性 — Processing を利用した画像表現
繁成 剛	人は家族の死とどのように向かい合ってきたか — 個人的な体験を通してグリーフケアを考える
柴田範子	認知症を抱えた高齢者と主介護者の支援経過と、ご家族を見送った主介護者の気持ちの聞き取りをして
杉田記代子	ルルドの泉でみた生と死の連続性
出村早苗	介護福祉士養成校における高齢者のターミナルケア教育の課題 — 介護老人福祉施設へのアンケート調査から
野村豊子	日をめくる — 生と死と回想
山本美香	高齢者の死と向き合う地域ボランティアをどう支えるか — 東京都A市でのアンケート調査をもとに
おわりに	プロジェクト研究の可能性

こうした研究の場を通して、学部教育のなかでどのように死生学に取り組んでいくことができるかについても模索をくりかえした。今回はそこまで至り得なかったが、死生学の具体的な教授法についても検討する必要性が痛感された。そのような議論の積み重ねをもとに、将来は学部の基幹科目としての定立や公開講座の実施なども視野に入れていきたいと考えている。

2009年7月3日に北京で国際シンクタンク・サミットが開催された。世界各国から経済界の指導者や研究者が集まり、地球規模で拡大しつつある経済危機を克服すべく講演や討議が行なわれた。これは民間人の主催であり、しかも会期はわずか数日間であったため、そこで実際の効力をもった採決がなされたわけではない。しかし、経済危機を前にして多くの人々が民間規模で集結したそのことが、大きなメッセージとして機能する可能性は否定できない。そもそもがそれを目的とした集まりであったという。

そのひそみにならって言うならば、ライフデザイン学部のなかで死生学というテーマの呼びかけに多くの教員が応じ、しかもそれがプロジェクト研究として採択されたことの意義は少なくない。これは今後このようなキーワードを学部の研究教育に取り入れていくことの有効性を問いかけるささやかなメッセージにつながるであろう。

東洋大学全体の中であいかわらず本学部は資格重視の学部と見られているようだが、以上のような共同研究の実践は、時代の動きに即応した学際的な研究が行なわれていることを外部に向かって発信する絶好の機会となるのではないかと思う。また、埼玉県は日本でもっとも核家族世帯が多い県であるから、個の次元で家族の死というダメージを受けやすい地域とも言える。そこで地域社会への還元という観点からも、学部において死生学を実践していく意義は小さくないと考えられる。

以上を踏まえ、学部教育のなかでどのように死生学に取り組んでいくことができるだろうか。その可能性を将来へ向けて検討していくことを次の課題としたいと思う。

## 死生学の構築へ向けて

ライフデザイン学的アプローチの探求

平成 21 ～ 22 年度 東洋大学ライフデザイン学部  
プロジェクト研究成果報告集

